

＜病院だより＞

公立南丹病院紹介

公立南丹病院長 梶田 芳弘

はじめに

昭和10年8月に南丹病院の設置が認可、翌11年4月より業務が開始され現在まで約72年間が経過した。当病院は、京都府のほぼ中央に位置（京都市より北へ30km）し、平成17年4月から平成18年1月までの市町村合併の経過により、構成市町が以前の1市7町から南丹市、亀岡市、京丹波町の2市1町に集約された（図1）。これらの行政区域は南丹医療圏を構成し、1,144平方kmと琵琶湖の約2倍弱の面積に当たる。現在この広大な地域唯一の急性期医療の拠点が公立南丹病院である。前回の病院だよりの平成13年から7年が経過した¹⁾²⁾。病院を取り巻く医



図1 南丹病院組合構成市町村図

療環境は激変したが、当院のその間の変化をおりませ紹介したい。

沿革（平成13年から平成20年）

平成14年4月、小児外科新設、診療科19科となる。12月、旧病棟と新病棟を結ぶ連絡橋完成（図2）。

平成15年1月、新病棟（第2病棟）完成。延床面積14,893.49平方メートル。看護専門学校完成、3年課程、1学年40名。4月、へき地医療拠点病院の指定を受ける。脳神経外科新設、診療科20科となる。歯科医師臨床研修施設の指定を受ける。6月、電子カルテ導入。12月、感染症初期対応医療施設完成。

平成16年3月、心血管造影撮影システム及び多目的血管造影システム設置。11月、京都府立医大学長を迎え公立南丹病院施設整備事業完成式。

平成17年4月、京北町が京都市と合併し、事務組合より脱退。10月、丹波、瑞穂、和知町が合併し、京丹波町となる。

平成18年1月、八木、園部、日吉、美山町が合併し、南丹市となり構成市町村が最終的に2市1町（南丹市、亀岡市、京丹波町）となる。4月、心臓血管外科、呼吸器外科新設、診療科22科となる。

平成19年4月、64列マルチスライスCT及び乳房撮影装置設置。

平成20年7月、DPC対象病院となる。

現況

現在22診療科、一般病床450床で、外来患者数は1日平均約1,000名、入院患者1日平均約



図2 国道9号線とJR山陰線を越える連絡橋を有する新病棟

380名である。職員は計500名（うち嘱託パート73名）のうち、医師77名（うち歯科医2名）である。医師の構成は研修医及び歯科医を除く全員が京都府立医大医局出身者で占める。大学医局の多大な援助により過去7年間に当院に新たに4つの科（小児外科，脳神経外科，心臓血管外科，呼吸器外科）が新設され医療圏内で、ほぼすべての医療が完結可能となった。また臨床研修指定病院（管理型）であり，研修医，レジデントの教育病院として人材の育成に力を注いでいる。現在大学とのたすきかけの4名と併せ14名の研修医，4名のレジデントが指導医の元，研修中である。その他大学より推薦された臨床教授の5名の元で，京都府立医大学生が定期的に臨床実習を行っている。また開放型病院として地域の開業医や病院と連携して治療にあたり，医師会の先生方やその職員の生涯教育にも寄与すべく努力している。本年7月よりDPC病院となり，今までの病院完結型から地域完結型医療へと転換すべく地域連携パスの開発を急いでいる。

病院における最新治療の状況

内科は一般，循環器，消化器，神経，腎臓，

呼吸器，内分泌の各内科からなり，循環器内科では心筋梗塞に24時間対応したカテーテル治療を含む循環器病の診断治療を行っている。昨年から新たに赴任した辰巳哲也副院長を中心に，京都府立医大循環器内科松原弘明教授のご指導の元，下肢閉塞性動脈硬化症や心筋梗塞に対して，骨髄細胞を用いた再生治療の準備を進めている。消化器内科では早期消化管癌やポリープに対する内視鏡的切除（EMR, ESD），また最近増加してきている炎症性腸疾患に対して白血球除去療法も積極的に行っている。腎臓内科は京都市以北で唯一の日本腎臓学会研修施設であり，184名の血液透析患者と19名のCAPD患者の血液浄化療法をはじめ，糸球体腎炎やネフローゼ症候群に対し正確な診断をするために可能なかぎり腎生検（年間約20症例）を施行している。血液内科では，悪性腫瘍治療は，簡易無菌室を使用した強力な化学療法から，外来化学療法室を利用した通院化学療法までの対応が可能である。神経内科では中瀬泰然部長が脳卒中治療を専門としており，脳神経外科と連携して，脳卒中の治療に，ほぼ24時間対応しているのが現状である。呼吸器内科は肺悪性腫瘍の化学療法に力を注ぎ，一般内科は，神経内科と協

力し、神経難病を含む患者の在宅治療を推進している。最後に内分泌内科は甲状腺疾患、糖尿病を中心に診療を行っている。

外科（消化器、一般、乳腺）、小児外科、呼吸器外科は1つのチームとして診療に従事している。例年400例前後の全身麻酔手術、100例前後の腰椎麻酔手術を施行、多くの外科系関連学会、癌関連学会の認定施設として消化器疾患、呼吸器疾患、小児疾患から外傷に至るまで幅広い領域の疾患に従事している。昨年度の主な疾患別手術症例数は、食道疾患10例（癌8例）、胃癌40例、大腸癌50例、乳癌18例、胆石60例、膵切除7例、肝切除7例、呼吸器疾患52例（癌30例）、小児疾患60例であった。昨年より赴任した上田祐二部長をはじめ各領域に精通した専門医がおり、近隣市町はもとより舞鶴市や兵庫県篠山市周辺からも貴重な症例の紹介を受けている。常に新しい術式の開発と手術の低侵襲化をめざし、呼吸器疾患はすべて胸腔鏡下手術、消化器疾患では良性疾患と早期癌症例には腹腔鏡下手術を行っている。また手術のみならず薬物療法（抗癌化学療法）に関してもEBMに基づき患者さんへの十分なインフォームドコンセントの元に実践している。

心臓血管外科は平成18年4月より開設され、これまでに虚血性心疾患に対する冠動脈バイパス術、左心室瘤などへの修復術、人工弁置換術、圓本剛司部長が得意とする大動脈解離や破裂に対する緊急手術など平成20年7月末現在で開心術（胸部大動脈瘤手術を含む）は60例（最高齢89歳、大動脈弁置換術を行い外来通院中）、腹部大動脈・末梢動脈手術は80例で、これらを含め全手術症例は250例に達している。京都市以北で府立医大関連病院では唯一の心臓血管外科で、北部の病院からも多くの患者さんの紹介を受けている。

整形外科は7名の常勤医師中5名が日本整形外科学会専門医でかつ医学博士を取得しており、各専門分野での臨床研究に従事している。特に小倉卓副院長を中心とした脊椎外科では、腰椎椎間板ヘルニアや脊柱管狭窄に対して、特殊な器具を用いて傍脊椎起立筋を温存し

た術式を導入することで、術翌日からの歩行が可能である。また頸椎から仙椎までの手術を行っており、脊椎外傷や不安定症に対しては脊椎インストゥルメントを用いた脊椎固定術を採用している。

小児科は小児外科の協力の下、約10数年前より24時間365日対応の小児救急医療を行っている。一医療圏で一病院が小児救急医療をすべて引き受けているのは京都府でも例がなく誇れる事と自負している。

産婦人科は、南丹医療圏では他に民間病院が一つあるのみで、一般の分娩のみならずハイリスクの妊娠や分娩、婦人科悪性腫瘍の手術療法や化学療法を一手に引き受けている。この功により長年に亘り産婦人科部長を兼務する大嶋一也副院長は、本年度の京都府立医大関係病院等協議会の地域医療貢献賞を授与された。

泌尿器科は、米田公彦部長が日本内視鏡外科学会技術認定医であるなど、泌尿器腹腔鏡分野のエキスパートであり、腎臓、副腎などの泌尿器科系腫瘍に対し内視鏡的的外科手術を積極的にやっている。

脳神経外科は平成15年4月開設以来、恵飛須俊彦部長を中心に頭部外傷、脳血管疾患をはじめ急性期医療を積極的に行っている。脳血管障害分野では、最近新たに開発された画像診断装置（三次元DSA、三次元CTA、拡散強調MRI）を導入し、神経内科と連携しながら急性期の治療にあたっている。また術後急性期から回復期にかけてのリハビリについても積極的に取り組んでいる。

眼科では伴由利子部長を中心に、疾患としては眼形成から網膜疾患まで、手術には日帰りの外眼部手術から網膜硝子体手術まで幅広く診療を行っている。外来には網膜の断層面が解析できる最新型の3次元画像解析装置が設置され、加齢黄斑変性症など眼底疾患の診断、治療方針の検討や治療効果の判定を容易とし、一歩すすんだ医療が可能となっている。その他緑内障に対しては従来の視野検査に代わりFrequency Doubling Technologyを用いた視野計を導入している。

耳鼻咽喉科は頸部、咽頭部、耳下腺の悪性腫瘍の手術療法を積極的に行っている。

放射線科では10数年前より、閉塞性動脈硬化症、急性動脈閉塞、腎動脈狭窄のIVRを手がけ、前二者ではContralateral Approachを発表し本邦での普及に貢献、後者ではBGCCを開発し、安全なPTRAを提案するなど、秋本和美部長は、この分野での臨床的リーダーの一人である。日常臨床では64列CTを診断上の武器とし、多数の症例にIVR診療を施行している。

皮膚科、神経科は一人医長であるが、地域住民の診療に全力で頑張っており、歯科では京都府北部の口腔外科治療を担当している。

おわりに

医療を取り巻く環境は非常に厳しい。公立病院にも早急な改革がせまられている。公立病院は地域住民の要望を受け、首長が計画し議会が承認し設立されたものである。当院の理念にある如く地域住民に信頼し愛されてこそ病院の存在意義がある。病院が地域住民に密着し住民のニーズに答える。また病院管理者や組合議会と常に意志疎通を図り、病院のおかれた状況を十分相互理解したうえで、一体となって地域住民の要望に沿った病院の発展を図ることが重要である。

文 献

- 1) 梶田芳弘. 公立南丹病院紹介. 京都府立医科大学雑誌 2001; 11: 29-35.
- 2) 梶田芳弘. JR線路と国道を越える連絡橋を有する

公立南丹病院の新病棟. 全国自治体病院協議会雑誌 2004; 43: 266-267.